読むだけで強くなる

防災小話 2「悲しみとの出会い方」

みなさん、こんにちは。神石高原町防災アドバイザーの内山です。平成 30 年 7 月豪雨から一年が過ぎ、当時を振り返るニュースも多くなりました。今日は、そこで出会ったニュースのお話です。

その当時、私は広島市消防局の依頼で現地に入り、ドローンを使って、捜索支援のための地図を作っていました。連絡が取れなくなっている方の、より早い発見と救助を行うための地図です。しかし、ある地域で、どうしても発見できない方がいらっしゃいました。先日、そのご家族の、今の気持ちや悲しみを記したニュースに出会ったのです。

大きな視点でみれば、防災とは、人類の生存可能性を高める活動です。生身の人間は、大自然の中、裸一貫で生きることはできません。そこで知恵を使い、自然を改変して、安全に生活できる環境を作ってきました。

中くらいの視点でみれば、防災とは、地域の未来を考える活動です。地域の過去の自然災害の経験を、世代を超えてまとめてみると、他よりも危険な場所が見えてきます。こうした場所とどう付き合ってゆくべきか。この議論は、地域の未来の在りかたを、そこに住む人々が自ら考える取り組みにつながります。

そして、小さな視点、つまり個人の視点でみれば、防災とは、悲しみとの出会い方（※）を変える取り組みといえます。人は必ず死を迎え、それは常に、つらく悲しいものです。しかしその中でも、自然災害による激烈で急激な、後戻りのできない日常の喪失は、人に、癒し難い悲しみをもたらします。一方で、自然災害による人命の損失は、多くの場合、適切な対策や、事前の避難によって回避できることも事実です。そのこともあって、守ってやれなかった、早く声をかければよかったと、後悔をしてしまうものです。

私は、災害が発生した後のドローン活用の研究も行っていますが、防災で一番大切なことは、やはり、災害が起こる前の行動を考えることです。「災害が起きそうな時、どのような行動をとらなくてはならないのか。」一人一人がこれを考えた時、大きすぎる悲しみとの出会い方を、私たちは変えることができるはずです。彼らの思いを、次の世代につなげていかなくてはなりません。

※大阪大学の渥美公秀教授、消防防災の科学 2016、No.125 の文献から引用

2019（令和元）年 7 月 9 日

神石高原町防災アドバイザー
内山庄一郎（防災科学技術研究所）